

エドワード・ミュア「導入部 ― 細部を観察する」(1991)

Edward Muir, “Introduction: Observing Trifles”, in Edward Muir and Guido Ruggiero (eds.), *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, The Johns Hopkins University Press, 1991, pp. vii-xxviii.

紹介

同論考は、*Quaderni storici* 誌からミクロストリア関連の重要な論文を選び出して英訳した論文集『ミクロストリアとヨーロッパの失われた人々』の序論である。ミクロストリアの手法をギンズブルグを中心に論じており、「徴候解読型パラダイム」の概要が簡潔に紹介されている。

○イタリアのミクロストリア¹

- ・歴史家の仕事と探偵の犯罪捜査（シャーロック・ホームズ）との比較は、いまやミクロストリアの方法をめぐる議論の中心。
- ・ミクロストリア発祥の地であるボローニャにおいてウンベルト・エーコが『薔薇の名前』を執筆したのは偶然ではない。ミクロストリアと同じ知的土壌によるもの。
- ・ミクロストリアの作品は歴史家たちの間でかつて支配的であった「量的社会科学」、「長期持続」、「動かざる歴史」への応答。
→歴史実践におけるこうした変化は他の学問分野の状況とも類似していた。

- ・イタリアのミクロストリアは次の二つの仕方新しい主張をした。
 - ①研究の規模を縮小し、社会思想に関する多くの抽象概念を分離して検証すること。
 - ②歴史学における証拠を評価するための代替方法として、「徴候解読型パラダイム（推論的パラダイム）」(evidential paradigm, paradigma indiziario)を提示すること。
→②は哲学者のチャールズ・パースが断片的な徴候を分類する方法として提示した「アブダクション」の理論に似ている。

- ・1977年にエドアルド・グレンディが「ミクロ分析」に基づく研究課題を提示²。
- ・1979年にカルロ・ギンズブルグとカルロ・ポーニが、フランスのアナール学派の支配的な影響からイタリアの歴史家たちを独立させるミクロストリア研究のプログラムを提示した³。

¹ ○で表記した小見出しはレポート作者が付した。

² Edoardo Grendi, “Microanalisi e storia sociale”, *Quaderni storici*, 35, 1977, pp. 506-520.

³ Carlo Ginzburg and Carlo Poni, “The name and the game: Unequal exchange and the historiographic marketplace”, in Edward Muir and Guido Ruggiero (eds.), *Microhistory and the Lost Peoples of*

- ・ギンズブルグとポーニは、フランスやアメリカの数量的で時系列的な歴史学が「通常科学」となっていることを認めつつ、新しい研究動向によって、一つの共同体や家族、個人のように極めて限られた現象を研究するエスノグラフィー的な日常生活の歴史学が創られていくことを予言した。
- ・彼らはイギリス、フランス、アメリカにおける同じような傾向をもつ研究者集団と同調していた。こうした歴史家たちは、ナタリー・Z・デーヴィスが「いわゆる物言わぬ民の社会的創意」と名付けたものを調査する方法を発展させようとしていた。

○ギンズブルグのミクロストリア

- ・ミクロストリアのもっとも重要な特徴の一つを明らかにしてくれるのは、オリジナルのコンテキストの内部で意味を正確に再構築しようとする文献学的な関心である。ミクロストリアの歴史家は、証拠の収集や批判において厳格な実証主義者の基準を尊重するが、証拠を用いる方法においてまったく異なる。
- ・ギンズブルグは、自身のラディカルな方法論的態度を説明するためにフロイトをモデルとした。フロイトにおいては、真実へのきわめて実証的な態度と、問い、関連性、方法、証明の基準に対する大胆な態度とが混ざり合っている。
- ・証拠的な厳格さと創造的な証明や秘儀的なトピックに対する開放性との結合は、後期のフーコーと比較するとはっきりする。ミクロストリアの歴史家たちとフーコーは同じようなテーマについて書きながらも、彼らはフーコーを引用しないし、ギンズブルグはフーコーから重大な影響があったことを否定している。
- ・フーコーの次の二つの側面がギンズブルグと相いれなかった。
 - ①フーコー自身の枠組みによれば、検証(verification)の基準は、過去を過去の語彙ではなく現在の語彙に従わせて「再親密化」(refamiliarize)する近代科学の規律(ディシプリン)に由来する。したがって、正しいこと(correctness)が意味しているのは、規律や制度によって定められた秩序に従うことである。歴史的な真実とは、歴史学の規律がそれだと述べるものである。
 - ➡ギンズブルグにとっては、正しさは人工的な構築物である規律によってではなく、過去がわたしたちに提示している具体的で物理的な真の証拠によって決定可能であるし、決定されなければならないものである。
 - ②フーコーは意識的に自らを過去と現在との間に置き、強制的な規律と制度によって想定された了解(understandings)を解消しようと試みた。そうすることで彼は過去を現

在から「脱親密化」(defamiliarize)し、過去をわたしたちの時代の理解の仕方にとって徹底的に異質なものにした。

→ギンズブルグにとってこれは、研究の対象から研究するという行為へと注意を逸らすことであり、一種の知的な窃盗(intellectual theft)であった。そこでは過去の整合性(integrity)が、現在はおろか学者の活動にまで従属させられてしまうのである。

- ・ギンズブルグが使ったのは旧石器時代の狩人の方法。
- ・狩人は、足跡から実際に見ても、聞いても、触っても、嗅いでもいないライオンを認識する。狩人の知識の特徴は「一見して重要性のなさそうな経験的データから出発して、実際には実験が不可能なある複雑な現実にかのぼる能力にある。またこの種のデータの観察者は、そのデータを一つの物語として配列する、という特徴も見せる。その最も単純な例は、「あるものがそこを通った」という物語的な配列の仕方だ」⁴。狩人の位置はフーコーの位置とは逆である。狩人にとっては獲物がすべてであり、彼はなにものでもない。

○ミクロストリアの問題

- ・ミクロストリアの方法がどれほど古くまでさかのぼれるにしても、選択性と重要性に関して次のような問題が立ち上がる。
 - ①どのような基準によって名前が選出されるのか⁵。
 - ②選ばれた主体の活動や思考は、社会的潮流や集合心性をどのように代表するのか。
 - ③選択がランダムでも統計的に厳密なものでもないときに、少数は多数について何を教えてくれるのか。
 - ④細部に関心をもつ歴史家は、どのようにすれば瑣末な歴史(trivial history)を生み出すのを避けることができるのか。

○「正規なる例外」(normal exception)

- ・エドアルド・グレンディは、こうした問いへの答えが「正規なる例外」(normal exception)という統計学上の概念にあると述べる⁶。
- ・グレンディによれば、下層階級あるいは文盲の人々の十分な痕跡が残されている候補としてもっともあり得るのは、反乱、異端、犯罪であり、そうした振る舞いは当然「例外的」である。

⁴ 引用は、カルロ・ギンズブルグ(竹山博英訳)「徴候——推論的範例の根源」『神話・寓意・徴候』せりか書房、1988年、190頁。

⁵ ミクロストリアにおける名前の問題については、歴史学文献レビュー③を参照。

⁶ Edoardo Grendi, “Microanalisi e storia sociale”, *Quaderni storici*, 35, 1977, pp. 506-520.

- ・ところが、ギンズブルグとポーニが指摘しているように、権威に対するある種の違反は、社会的周縁にある人々にとっては「通常」の振る舞いを構成している。
- ・違法で禁じられた行為であっても、矯正する手段を他にもたない人々にとっては、それは「通常」である。違反者は政治的もしくは教会的権威によって定められた規範にとっては「例外的」であるかもしれないが、彼ら自身の社会的環境を完全に代表している。
- ・また、どのような行為や思想が範囲外〔通常でない〕かを理解することは、なにが通常かを定義する支配者集団の特徴をよりよく記述する助けとなる。
- ・権威によって作成された文書史料が従属諸階級の社会的現実をゆがめている場合に、例外的な文書史料、とくに下層階級の証言者の確かな言葉を記録しているものであれば、大量のステレオタイプな史料よりも多くのことを明らかにすることができる。

○「徴候解読型パラダイム」

- ・「徴候解読型パラダイム」によれば、未知の対象は、反復可能・数量化可能な観察によって引き出される法則を適用するよりも、一見重要ではない一つの徴候を通して明らかにすることができる。
- ・こうした「徴候解読型パラダイム」について、ギンズブルグは 19 世紀末に開花した三つの学問分野（美術史、精神分析、犯罪学）の方法を分析することによって論じた。

- ①美術史 →美術史家ジョヴァンニ・モレッリの絵画の細部の研究（たとえば耳の形）
- ②精神分析 →フロイトの精神分析（意図せぬ失言や無意識な症候から隠された事柄を見抜く）
- ③犯罪学 →フランシス・ガルトンの『指紋』（1892 年）やコナン・ドイルの推理小説（シャーロック・ホームズ）

- ・モレッリ、フロイト、コナン・ドイルに共通しているのは、19 世紀末という医学的症候学が次第に影響力を増してきた時代に、医師としての訓練を受けたこと。
- ・こうした「徴候解読型パラダイム」の系譜は、旧石器時代の狩人、メソポタミアの占いの書、ヒッポクラテスにまで遡り、医師、歴史家、政治家、壺職人、大工、水夫、狩人、漁師、女が包含される。
→これらに共通するのは、部分的な経験から全体の知識を作り上げること。

- ・個別のものに注目する「徴候解読型パラダイム」は、数量的調査に依拠するガリレオのモデルと反比例の関係〔トレードオフの関係〕にある。
- ・一般化の数学的な基準を採用することによって個別の理解を犠牲にするか、科学的で「あろう」仕方で個別の事例に基づく「徴候解読型パラダイム」の方法を採用するかの

いずれかである。

- ・歴史学の知はつねにある程度は推測的なものである。歴史家の仕事は、医師が実際に病気を見ることはできないが、症候によって間接的に病気を診断できるのと同じようなもの。

- ・「推測的証明」(conjectural proof) の二つの方法。

①積極的方法

→狩人や探偵が足跡や指紋を使って、知ってはいるが見たことのない動物・人物を特定するように、「鼻」、「耳」、「テキストの引用」のような特定の細部を比較する。この過程において、細部の類似(likenesses)がもっともありえそうなことを確認する。

②消極的方法

→一つの仮説が残るまで他の仮説をふるい落とす。この場合、ありえそうなことは、ありえそうもないことを取り除くことで取り出される。

○ミクロストリアに対する批判

- ・ミクロストリアの方法には厳しい批判が寄せられてきた。
- ・こうした批判は部分的には、ミクロストリアの推測的な性質が受け入れがたいため。
- ・ミクロストリアを理解するためには、証明に関して何が「推測的」であるのかを知り、どのような過程を経て事実の観察から結論へと移行するのかを知る必要がある。

○ミクロストリアとアブダクション

- ・ミクロストリアの論理過程のもっとも明瞭で一貫した分析は、チャールズ・パースの「アブダクション」(abduction)という概念に見出すことができる。
- ・「アブダクションは驚くべき事実を説明するのに理論が必要であるという感覚によって動機づけられている。しかし、最初は何か特定の理論を持つことなく事実から出発する。帰納法は理論を支持する事実が必要であると感じている。しかし、最初は何か特定の事実を持つことなく候補となる仮説から出発する。アブダクションは理論を求める。帰納法は事実を求める。アブダクションにおいては、事実を考察することによって仮説が提示される。帰納法においては、仮説を研究することによって、仮説が指し示した事実そのものを明るみに出してくれるような実験が提示される」⁷。
- ・アブダクションは何かを証明するのではなく、かもしれない(may be)ものを提示するだけであり、証明は帰納法による。
- ・アブダクションの意義は証明にではなく創造的な可能性にある。

⁷ Umberto Eco and Thomas A. Sebeok (eds.), *The Sign of Three: Dupin, Holmes, Peirce*, Bloomington, Ind., 1983, p. vii.

- ・ パースによれば、アブダクションは「新しい考えを導出する唯一の論理的な働き(logical operation)である。というのも、帰納法は価値を決定するだけであり、演繹法は純粋な仮説の必然的な結果を展開するだけだからである」。
- ・ アブダクションはもっとも豊かであるが、もっとも確かではない方法。

○アブダクションと推測の危険

- ・ ミクロストリアの議論は循環に陥りやすい。
- ・ あらゆるミクロストリアの解釈は、部分と全体との間の交互のやり取りを前提としているために、解釈の悪しき循環に陥る危険が存在する。
- ・ 悪しき循環に陥っていないかの最善のチェックは、いくつかの独立した調査の線を収束させることである。
- ・ だが、偶然の一致ではなく真に収束していると言えるのはいつなのか。
- ・ この問題に対する最善の答えは、「内示」(to show, mostrare)と「外示」(to demonstrate, dimostrare)を区別することである。

①「内示」

→対象の内部構造における形式的な類似を明らかにする (cf. 同じ画家によって描かれた複数の絵画に同じ様式的な特徴が見られるのを示す)。

②「外示」

→対象の外的な証拠を用いる (cf. 同じ画家が二つの異なる絵画を描いたことを示す契約書を示す)。

○「ギンズブルグのかみそり」(Ginzburg's razor)

- ・ 精巧な循環論法に対する最後の砦。推測を用いる場合にギンズブルグが自らに課したルールの一つ。
- ・ 「ほかの事柄が同等な場合には、もっとも少ない仮説を要求する解釈が一般的にもっともありえそうな解釈と見なされるべきである」。

○ミクロストリアの目的

- ・ 歴史の規模を巨大化することによって生じたゆがみを取り除くこと。
- ・ 現実生活の大部分が生じるのは小さな集団のレベルにおいてであり、そこにおける歴史の原因を明確にすることによって、他の方法では無視されてしまうような人々へと歴史を開くこと。